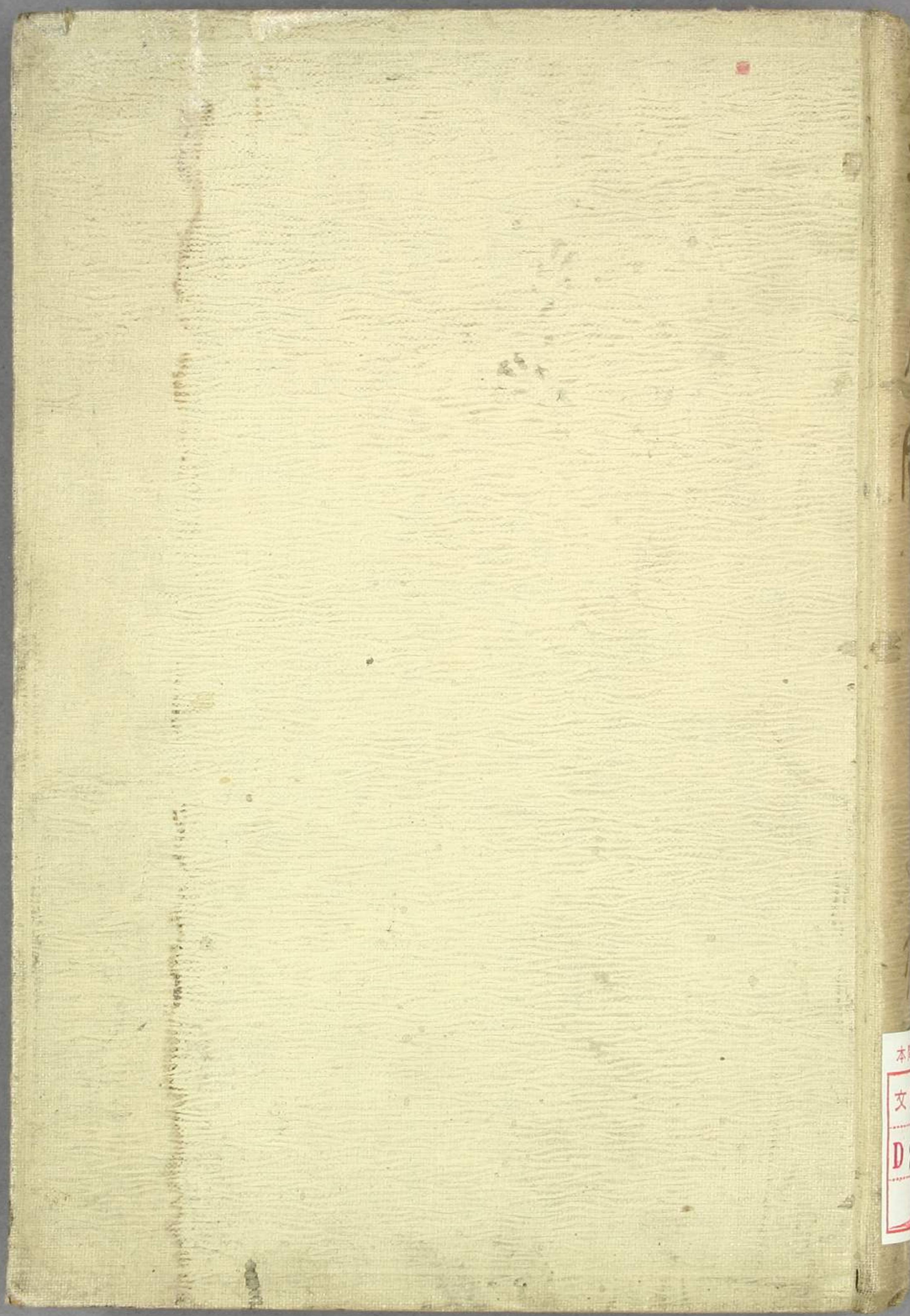


75

70

65

60





14



昌黎公
同人

二十八宿

橫濱夜雨著



二十八宿

橫瀨夜雨著

三たび足たりぬる年のおもひ
出に新しき詩と古き詩とをあつめて
母ぎみへまゐらす

かぞいろは あはれと見ずや
ひるの子は みとせになりぬ
あしたゝずして

新月之卷

二十八宿

目 次

新月の巻

野に山ありき

雪燈籠

小父君憎し

唇に

私は勞れし旅人なり

夕 雲

川 霧 枕 手 紅

鞭 箍ぬすびと

戸 堤の戸

翁 鳴雪翁に
贈 杉を贈りて

子 教へ子

塚 美女塚に立ちて

晴 梅雨晴

蛇 金蛇

枕 父の手に枕せしめて

抱 醉茗が子を抱いて

捨 篓投捨て、

けり 吾唇は燥けり

死 乙は死にけり

去れ 人は去れり

影 夕月の巻

尾上の月

祝言

うもれ木

ありあけ

花櫛

焼野の雉

うつしゑ

賤機

お才(一)

お才(二)

河原柳

八重綸子

野水を憶ふ

ちぬの浦曲

花藻

柔肌

二十八宿

新月の卷

横瀬夜雨著

野に山有り

野に山ありき
葱苔
蔓なる花のほのぐと

匂ひて曉の紫は
筑波に負へる色となり

雲、南に浮くとのみ
かすめる空に鳥鳴きて
竹の小弓を携へし
子等は麥生に置るらん

青葉の堤青嵐

路こそ草になりにけれ

森の西なる夏沼の
水は二人に開けしを

櫂は舷に横へて
吹かるゝまゝに逝くまゝに
風芳はしき鳥羽の海
人よ舟には怖れずか

否、巖黒き大磯の
浪に鋸へし姿なれば

船底に星照る朽舟の
沈むは物の數ならず

君行る舟の覆りなば
泳ぎ歸らん、水色の
裾に絡まる萍は
花は額に飾らんもの

濡れて艶ある黒髪は
新に解きて灑ぎけん

やつれたりとて見えぬ頬の
など夢のごと蒼白き

せよと夫の言はゝこそ
紅も薄らにさすべけれ
故ならぬ髪の毛は
搔上るたびに亂るるに

姉に戯る籠居に
具は敏く彈きしか

反りて落さぬ手の中に
絹の毬のみ突き馴れぬ

春、華美なりし宮仕
御守殿風に粧りては
花散り埋む渡殿に
翻しし袖の長うして

初めて山といふ山を
見しは月波の秋の雲

青を
溪に潜める澤蟹を
袖に押へて捕ふると

指を噛まれし痛すら
覺ゆるものを見れば

山は野に在り、舟に居て
背向になれば舷ぐに

吾手に縛る君が手の
微に著き血のめぐり
小蜘蛛に似たる虫跳ねて
静に軋る日の車
耀ふ浪の眼を射んに
傘の薄きやさしかけむ

人は見るとも夏霞
鬱く岸は草深し

眠るとならば頬を當てゝ
膝にねよかし妹の

夢には戀ひし天もあれど
春は武藏の野に暮れぬ
人遠くして寂しさに
今は心の破れたり

人の肌に手を觸るは
新なるべき君が手よ

暫時は許せ、わが胸に
遠退く浪の音あらむ

土弄りする
下髪の
妹は君に
来れるなり

朝咲く花の翳なき
露とも思へ君が手に

かゝる涙は遺瀬なき
わが思出の涙なり

嗚呼、人何なれば胸を明けて
吾掌を當つるらむ
そよ海の底深く
浪は鳴るとも聞ゆれど

垂れて頂に纏くべくも
左手は君に把られけり

た い戰たたかける唇くちびる
小指こしゆのはしに觸ふれしめよ

寂さびしく生きし
われなれば
人ひとを見みんとは
思おもはねど

涙なみだに曇くろぐる
瞳ひとみをあげて

對おへば君きみも
さしぐむか

天あの路じに
離はなれての
雲くもは月つき波なみに

死しにぬと説いわうて
欺あざくも

終に忘る、

われならず

君よ行くとも
命は神に

七星霜の

吾手に歸れ
一度は

妻と呼ばん

野の家に

十年に過ぎぬ

夢は二人に

千代の縁を

さめぬとも

命は共に
許されず

君よわが名は
白きに化りて
石の戸にさす
臙臙に
影の如き
なりぬとも

貞、
月波の
草がくれ
露にしをるゝ
痛める胸に
花ありきと
銘して

雪 燈 籠

一八

雪を交ふる雨なれば
春も名のみに歸りけむ
南の様の端濡れて
内は小暗くなりにけり

言はで立つ妹の
髪も額も隕に
雪の白きも地に落れば

雨に消さるゝ春日哉

花守、花を植ゑずなりて
苑には石の轉ぶのみ
小菊枯れて残れるに
竹の折戸は鎖されず

露霜下りぬ朝より
草は日に日に緑なり
嗚呼紅の花咲くも

一九

誰かまた我に手を貸さん

雨は斜に落し来て
雪は軽くぞ入亂る
光を包む灰色の
天は夕になりゆくか

(許せ、夢なる
母をすら
忘れて傳ふ)

頬の涙

乙に譲れる乳房すら
再母の賜ふまで
可愛しがられし中の子の
我は拙き運命とて

孤獨に馴れし後ならば
沈黙の森に留まらむ
明日より出でゝ尋ねとも

君を何木の隈に見む

三

光青透く母衣蚊帳の
一つ枕に三人寐し
姉は鞍馬の雲珠櫻
花薄うして散りぬれど

有りとは分かぬ天の雲
母も天にと教ふれば
泣くのみなりしが丘に

君と相倚る我肩よ

花や煙と渦いて
壁に這ふらひ烏瓜
落日は兄妹を照せども
影は三にもならばこそ
母のと聞ける懷かしさに
面影遮ふ古鏡
息吹きかけて拭へども

二三

拭けれども人の見はれす

二四

小女なりける
瞬間は
優しき眉も
在せしか
鐵漿黒々と
歯を涅めし
とばかり母を
覺ゆるに

家妻めかす
妹の
異なる人とも
見ぬからに
弱き吾子を
哀みて
母は妹を
遣しけむ

二五

受くれば溜る
泡雪の
軽きを打ちて
丸め作す
雪燈籠は
脆くとも
灯入れて君の
眉を見む

長しと思ひし

かうがい
も
挿せばさしも
相應もの
乗懸の晴の旅なる
のりかけのなす
留めたりや
ぬに伽羅は

森隠
十三塚の

明日は越ゆらむ

霧の海うみ

背向あか

過くわ

鞍くら

の上うへ

切き

ては山やま

を

顧か

みよ

兄あに

になればや

柔じゅう

順じゅん

なる

君きみ

が幼おさな

名なを呼よびて

母はに代かりて

命なまするは

今は終おひりと

なりにけり

妹いのち

小父君憎し

眉もやがては剃るらんとや
小父君憎し鬚男
たゞ若草の綠なる
に誘へ、吾抱いて

結付草履の絹の紐
甘酒しんじよと賺すとも
茅花に足をとられなん

小父君參れ、岡に

わが唇の紅は
母の乳房に觸れてなり
顔な重ねそ頬の上に
君が鬚はよ、疼きもの

唇に

(狂せる人に)

置露白き

薔薇咲く野べに

女神の像の短夜を

汝が唇を倒れ伏す

唇に觸れて見よ

鏡曇らす

眼にも宿さん

息あらば

たゞ野に遊べ

暁の星ほし

花はなしろ

白き

虹の浮橋消え勝の

彩いろをやなが
長ながく
有ありと見みる
少女おとめの顔かほを
傷きずつけて
血ちを見てたのしむ
蛇への脱ぬげ
帶おびの如ごミ
かるを森もりに

鬢ててがいいかかい
花はなには駒こまの
君きみようそぶけ
薔薇ばらの野のに
弱よき子眉まゆを
ひそむるに
見てだにも
亂ふたたるとも
繫つながれむ

我は勞れし旅人なり

三六

鹿島の海に湧回る

潮を沖より巻き騰げて

陸に落せし暁の

風は雲井に潜みけり

蘿纏へる石の門の

碧きを打ちて横さまに

珠の簾と懸りけん

粟殼岡穂は斷れて

額に渦巻く立髪も
足に絡むしだり尾も
瀧なす雨に叩かれて
野飼の駒もしをれけむ

霧にしめれる

雨引山の

林の奥に

栗の木もあとなく

山に植ゑし一うねの
蕎麥は花こそ名残なれ
立てる、伏したる、斜なる
莖の弱きは摧けつゝ

葉と葉と摺れて鳴る音に
口髭反らす地鼠の
啣みて穴に引かまくも

雨は尾上を遡り行きぬ

七日雪降る冬にすら
埋もれざりし筑波根の
翠よ色を失びて

砂の上なる塔の
壊るゝ如く壊れては
萱家の村に茂り合へる

秋は空しき
猿飛びて

石の蔭より

見下ろせば

常陸國原

雨と風とに

逆らひて

搖かせし

枯れける草か

野の西に

日は力なく

落つれども

眞青なる空に

雲絶えて

峯も麓も

しづかなる
山の上行く

我なれば

御空に在るに

似たるかな

路は雲母の

あらはなる

峠に沿うて

たどくと

行けども家の

まだ見えで

我は勞れし
旅人なり

夕雲

汀にあしの花散りて
霧こそ罩むれ下つ瀬に

靡く尾花の末遠く
秀づる峯は筑波嶺か

浪たゞ白き大利根に
行暮らしたる旅なれば

我がなつかしむ山のみは
かくさずもあれ夕雲よ

川 霧

世の中は思へば安き浮きぬ哉かな
枕流るゝ利根の川船

枕流るゝ利根川の
舟に一夜の夢載せて

置霜白き舷に

片しく袖は凍れるを

川は
つら深く立
霧は常陸に連なるか

手枕

人戀ひしそ夕ぐれ五日月を絹川べりに顧みて

花の顔
色深く
君、纏へす
袖匂ひ

鐘の音遠き
夕暮を
われ廣き野に

さまよふか

手枕痛き
をぶすまに
通ひし夢を
契にて

涙溢るゝ
わが秋の
月にを泣かん

君ならば

五〇

紅

といろと鳴らす足音に
夢をさせしうたゝねの
枕に敷ける編針とりて
たゞ戯れに眺らへしか
新桑繭の絹を纏る
五色の糸は光あり
小指の尖に綾どりて

五一

いしくも編める妹よ

霞たなびく夕暮の
山を名がきし編模様
匂へる房をそと解けば

心にくきは悌の
母に似へる眉のみか
膝にこぼれし紅は

髪のみだれの釣とも

鞭

ほどけかゝりし絹の紐
ゆるき靴もて青梅の
幹はよづるに難ければ

眉ふりかくす放髪の
姉なる姫は長のびて
あぐる腕の白きかな

袖を抱へて敷石に
かゝみ在せし二の君の
まろき瞳のやさしきが
床に置きける銀の
鞭をおろして走り来る
庭は木立の縁して

鞭は短し枝高し
踊り上りて下つ枝を

拂へど散るは若葉のみ

母屋の屋根に鳩鳴けど
二人の姫は言はで
園の白日は寂なり

蓑ぬすびと

上

二人在れど
物つゝましう
袂のみ
折りつ疊みつ
面隠
少は
隠る、妻の

心憎きに

白樺の

梢に獲たる

蓑の虫の

蓑を解して

桜子が

笄入の

黒塗の

握れば縮み

地の上に

落せば伸びて

丸く黒く

蠢く虫の

着欲しくも

蓑は剝かれぬ

下 櫻散る 春の暁
花にのみ 夢は残りて
言はぬ 罪を攻むれど
すり脱けて 妻は逃げけり

蓑虫は 裸になりて
玉匣に 紅の 細なる
隠れし管の 紐を噛み切り
唐文の 衣を纏ひぬ

織りける 箍は
高處なる
樹にこそかけめ
追剥に
追ひ落されて
哀なる
虫はふたゝび
巣籠りにけむ

堰の戸

井の中に
竹持ちて
木より落
る
家舊し
返り
雨は
三毛の雄
古き檜垣を
たりし
の子の上
に
の子の上
に
生れて
て

芋洗ふ

姉は走らず

秋は今
溢柿の
大蜻蛉
牛部屋の
半なりけり
紅き葉がくれ
飛ぶに疲れて
板に宿れり

日暮るれば
森に鳴啼き
夜明れば
田に鳴飛ぶと
草の中に
鶴鉢は張れども

雨に濡れて
鶴のみ流る

蕎麥の花
山遠し
生ける案山子
一村は
雨に濡れり

秋は今
厩戸の
蓑も腐れ
笠も破れよ
半なりけり
馬も肥えたり

堰の戸に水は溢さずや
 七星かくせる雲に
 晓の光迷へり
 石に當てゝ鎌を磨けば
 石の上に雨は注ぎて

鳴雪翁に

賜の草莖千蛙
 尻に槍を貫かれたる
 冬の蛙の物語
 膝なる子らを倦ましめぬ
 君は興ある大父なり
 み袖にかくす杯は
 ねざめの老の薬てふ

如何に釀せる酒なれば
額鬚白き顔の
桜の色になりぬらむ
木曾路に歸る馬追の
單衣の袖は破れけむ
鹿島の洋の秋の浪
寒き潮に舟行らふ
われは常陸の白水郎の子なり

蜻蛉馬の御所に萩散りて
蟋蟀すだく月の下
南に落つる大利根の
川門の水に釣上し
蜻蛉の法師やまゆらせむ

杉を贈りて

信濃の友に

八幡の森に雷落ち
千年の杉の倒れけり
裂けたる幹は逆に
荒木の矛を立つれども

朝日出づれば湖の上に
夕日沈めば河尻に
影を落せし杉の木は

緑の土にかへりけり

埋みのこしげの跡や
多賀谷が館の三の丸
都に入りし一姫の
涙の手にも觸れにけむ

館は朽ちて美女塚に
龍膽の花咲きながら
洞となるまで飲みし

杉は北にと折れにけり

檜は木曾に茂れども
杉は信濃に無き木てふ

見ようす色の木の膚の

馨るを君に配つなり

筑波に落つる布引の
瀧にて割りし板なれば

削らず塗らず素肌ながら

手箱に造れ新妻の

教へ子

教へ子の年だけて訪ひ寄れるがあり

卷きては野べの野老蔓
這ひ回ふ蔓のごと
圓きは空の月の
満る面に象りて

唯丸らかにしなやかに
母に習ひし手なればや
櫻散るなる嵯峨風の

假字は女にふさはしう

筆持添へて書かすまで
幼なかりし童女も
七年ぶりに相見れば
眉美しう齊ひて

墨を塗りけむ唇に
今亦さすは何の色ぞ
筆は再執りぬとも

戯けて頬はよも染めじ

りを書き難て

涙に暮れし舊事を

語り出さば袖屏風

見よ秋の雨白くして

楓植えたる中庭に

越突馴れしかぶきりの

君は面をかくすらむ

君を見知れる母も在り

今宵は宿れ寒くとも

一人の雨の寂しきに

世を佗びはてしうた人の

妻とは言はず妹よ

美女塚に立ちて

決れども落ちぬ刀根川の
水や海とも湛へけむ
空は晴れたる江の北に
雲きらくと漂へり

菱を啄む鴻の
櫓の下に浮寝して
西は淺間の煙だに

水に浸りて這ふとのみ

兒等が棹さす盥舟
覆れども淺ければ
菖菜の中に苔りて
處女も稀に濯ぐらむ

箱根は遠し
秋の雲
行くこと遅き

氏康が

青貝擢の
鞍置ける

駒の蹄に
觸れてより

月波を越えて
西すべく

佐竹も鞭を

鳴らさねば

大野に靡く

青き色なる

草ありや

常陸は山の

稀なる

雲のはたてに

鷹逸れて

日の夕暮に

多賀谷が館も

落おるごと

水みづに沈しづめる

脆かりし名は

落おらにけり

美女の

石に残りて

梅雨晴

きよ子生れし時、父なる友は雲遠き石見に在りき

野の
に雲を見る
梅雨晴の
光は空に
満ちしもの

朝旦生れし
可愛兒の

清と聞くこそ
嬉しけれ

花香はしき
夏なれば
露も白きに
凝るか

有りやの眉の
しなやかに

眼は涼しき
新星の

剪らねば延びぬ
産毛てふ
髪はやがても
肩過ぎむ

旅なる父は
石見野の

八日か月を

見ざりしや

君が聞くべき
初聲は

東の草に

觸れしのみ

草には見えよ
夏花の

花にも肖らん
兒が面影

八八

金蛇

葦の根洗ふ
色まだ鈍き
薄霧閉す
靈の跡こそ
遙なれ

新潮に
乾坤に
星落ちて

八九

八雲群
やくもぐらぐ

暁の
あかつき

光さし來る
ひかりし來る

眩さに
まばゆに

耻ぢたゆたひし
はぢたゆたひし

昔少女は
むかしめの少女は

暗の俘と
やみのこりと

なりにしか

えでんの園の
えでんの園の

春たけて
はるたけて

花まづ天に
はなまづあめに

柔肌玉と
ひだりと

清き子の
きよこ

瞳はやゝに
ひとみはやゝに

曇りけむ
くもりけむ

摘めば萎るる
つめばしおるる

紅の
花を啣むは

とがめねど

金の鱗

輝かす

蛇は腕に

纏きしなり

手を觸るるだに

耻しき

手を觸るるだに

耻しき

乳こそ衣に

覆ひたれ

項にかかる

千筋の髪の

黒髪の

弱きかな

人なつかしさ

花散里に

臘夜を

嫁ぐとて

鬢青き

鞍壺に

撓へる

鞆は

鳴らさねど

さよばひ行きし

み越路に

鶴を怨める

命ならで

白薔薇かくす
戸の奥に
籠れる我を
誰か訪ふ

曙領す

おうるらの
かがよふ羽に
つつまれて
玉のみ門の

ほの見ゆる
しおんの山に
奔らんか
遙にてらす
月に浮かる
山の端の
空も文なき
魂を
暗にして

誰
歸れとは
魔く

鏡に映ふ
月の眉

薄紅の

つつめる衣の
袖破れて

釵の珠も

碎けけり

花はうつろふ

静心なく

窓の外に

調ぶる琴の

爪投げすてて

絃されて

眺むれば

祖^{シテ}く春^ハを

あれちらくと

夢多かりし

静にかへる

雲は繪島の

沖に迷へり

漕ぐ舟の

浪の上へ

夕ぐれの

父の手に枕せしめて

山島しづ子のわれと同じ病に罹りて先だち死せるに

日月も星も

暗き世に

われ死なんとは

思へども

乳を賜ひし

母なれば

せめて生きよと

願ふらむ

生きよと祈る

母が手を

離るとも無く

離れ行きし

人の遠きを

傷むとも

誰か浮たる

戀と謂ふ

夢なる母の
肌はだならで
知らぬ少女を
父の手に
枕せしめて
鹿鳴く山に
行秋の
埋められ

齊のへる眉の
萎れ勝にて何時とても
長き睫毛を見えしを
影は瞳に閉ぢてより
絶えぬらむ

炎は天に
海に落ち
立昇る

君はたのしや
百合馨る

よるだむ川を
越えしなり

緑にかへる

筑波根の

峯にも尾にも
雪消えて

墓標に植ゑし

八重櫻

彌生は花の
遅く散らむに

醉茗が子を抱いて

此處へと膝を指さして
招けば目には領けど
母が袂に面隠
隠れて正に見えぬ子よ

忍び來りて背より
肩を押ふる手を掴み
抱けば膝に抱かれて

頬にこそ觸れ額髪

緋色勝なる附紐の
長きは腰に手ぐまりぬ
年はと聞けば彌生子に
一歳違の姉と言ふ

指先軽う掌を突いて
いつちくたつちく太右衛門の
乙の姫はと教ふれど

耻はらてか人の口籠くもりて

母はに縫からまる妹いもうの
脇わきより襟えりを探さぐる時とき
知しらず顔がほして眼めを外だらす
稻いな子こは眉まゆの美うつくしう

吁あ我わにも欲いしき妹いもうの
一人ひとりは母はの許ゆるしなば
斯この子こを胸むねに搔抱かきいだき

常陸國原見せんもの

旅たびの情なきに疲つかれては
歸かへらんことを願ねがふのみ
夢ゆめは綠みどりの草くさの野のに
涙なみだも落おちつれ母ははを思おもひて

笠投捨て、

故ありて去られたる妹の、子らが像をつくりかけたるを見て

剃す習ひの産毛だに
惜みし子等がいたいけの
型を彫ると笠執りて
半成りたる像に
對へば落る涙かな

立てしばかりの眉毛こそ

今は薄らに延びにけめ
七つに少き中の子の
妙子は色の白くして
猛き父には肖ざるもの

綾江は數て九つの
今年の春は髪も結ひ
帶も自づと結ぶらむ
教へし母は人故に
馬立の里に逐れて

毛嫌する末の子の
乳母の乳房に親むまで
遣じとせしも奪られて
朱房くけたる長枕
一人寝るに廣うして

髪の端だに似るやとて
削れば落る土屑の
膝に亂れて似もせぬに

手を過ちて眼を突けば
うらみや瞳傷きぬ

たとひ吾子の顔は
物にうつして置かずとも
胸の奥に記して
千代も忘れじなまじひに
見れば泣くべき像なり

籠投げすて、圓窓に

頬杖つけばそゝけ髪
野に緑なる草を見る
一都は西に八重櫻
吾子も花となりぬらむ』

たま／＼人の憫みて
母はと問へば死たりと
對へて足をかへすと聞く
真か・母は一人居て
死にもせぬものはらからよ

吾唇は燥けり

夕やけの雲

星影輝く

天となりぬ

一人さまよふ

草の門に

落つるは冷たき
涙のみ

筑波の山の

猿飛岩も

踏みたたらかす

足はなえたら

来よと言はば

ぬぎりてだに

行きて君に

縋らんもの

吾くちびるは

燥けり

燥いて

焦れんとすれど

露を刺に貫ける

薔薇の花の

白きは人なる

君に似たり

肩に凭れども

手に觸るれども
答めず

許せし

人は居らぬ

銀杏の森は

骨立ちぬ

古里の

暗き夢より

さめ來れば

野上を光す
電の
影は痛める
胸の中に
差すとはそれど
留まらで

乙は死にけり

小牧厚彦の慫死をいたむ

雲閉す
乗鞍岳の

山上に
乙は死にけり

秋草の
花に残りし

日光すら
西にと落ちて

足を曲げて
伏せる時よ
誰侍りて
瞼を閉ぢしめし

足を曲げて
伏せる時よ
誰侍りて
瞼を閉ぢしめし

水雨ふる

嵐の中に

凍えつゝ

乙は

火を焚いて
暖めやらば
唇に
紅は潮しけむ
母を呼びて

取縋らまく

聲すら

立たずなりしを

靈なる

雷の鳥の

岩がくれ

飛ぶと見れど

飛驒の嶺の

四より

人は下りす
なりにけり

嗚呼天そそり立つ

雲の上に
雲を繞らし

荒巖の
壞れぬ限
切めて守るか

乙おこ
が
亡なき
靈たま

一一四

人は去れり

人は去れり。さらに春子と別れんとして

人は去れり
天の遠きに
手を擧げて
來よと招くを
眼にすれど
露多き野の
草原に

一一五

雲の薄きが
行くばかり

人は去れり
寂しさ迫る
誰彼の
暗きに立ちて
名を呼べば
隠れ勝なる
糸遊の

現無の影も
惜まるゝ

人は去れり
昨日は乳の
欲しかりし
母も戀しの
人ならず
寝んに瞼の
眩ければ

白日の光の
厭はしき

人は去れり
水も流れよ
雲も避け
一人の上の
秋ならば
葉山茂山
蔭亡せて

月波は冬の
木立せよ

我には人は
電の中には
光の中には
来ぬるのみ
我には人は
光の中には
電の中には
光の中には
光の中には
光の中には
光の中には
光の中には

去にしのみ

手は白かりき森の沼
若葉の淵に櫂とりて
水を彈きし玉ゆらの
人は我より匿れけり

菱の實喰ふ鴻の
岸に鳴く夜は萍の
白める花も燐むら

仄に煙る霧降りて

毛は黒かりき有明の
灯を耻る對居に
慎ましかりし物腰の
夢のやうにも見えながら

色亂りなる花苑の
星は新に輝かむ
僕去りし朝より

わが世は暗くなり初めぬ

草長うして
瑠璃色の
山は常陸に
秀づれど
野の花に見る
紫の
月波に君も
離れ行くか

立つに艱まば
わが肩に
凭れとさゝやく
妹の思無氣なる
面見れば
放しともなき
諸手かな

姉あねと言いはる、
年としならば
憂身うみを膝ひざに
投なげかけて
疲れつかれし額ひたひ
胸むねに寄せ
ただ一時ごきを
睡ねむらまし

三櫛みくじ黒くろき

毛けの亂みだられ
頬ほとすれくに
寄添よりそひて
我わが血ちに塗あし
瞳ひとみをば
匂におへる袖そでに
伏ふせんと言いふに

形かたちは捨すてぬ
影かげを追おふ

涙は母も
容すらむ
ほの見し人は
罪ありて
我に置れし
處女なり

都を西へ
暁の

月を慕ひて

落にけん
稀には風に
吹かれ行く
悲しき人を
夢みれど

今は痛める
胸の奥の
佛人と
なりぬるに

夕月之卷

秋なり、醒めて
詩の宮に
我は廻らん
籠の
扉は打つなけれ
妹よ

夕月の巻

影

月の夕、ひとり過ぎ行く少女を野邊に見て

影まだ淡き夕月の
照せる野べに俯きて
睫にあまる涙をば
稀には袖に拭ふらむ
静に歩む少女あり

風に戰く花すすき
芒が中に一筋の
路をし恃む秋の野に
映る我身の影見ても
寂しからんを哀なり

いかなる憂を藏めれば
花の少女のたゞ一人
解れし髪をかき上げで

濡るゝ裳裾をさながらに
片足羽川の大橋に
藍もて摺れる衣着て
赤裳裾曳渡りけむ
昔少女が面影を
今眼のあたり見つるかな

手枕纏きて語らひし

我妹子ならば呼びとめて
暫なりとも泣かさじを
月に背きて行く人の
悲しき影はあれ限りに

尾上の月

浪なみに漂たよふ
纏わづかに結むすぶ 舶枕かたまくら
八重やえの汐風しおかぜ 假寐かりねにも
一葉いっはの舟ふなと 帆ほに受うけて
浮うきびては

風ぎし思ひの

無かりし處

緩き流れに

花散らふ

磯邊堤の

桜川

暁深く

別れし妹が

立霧に

面は

鑄られしに

恰胸に

古ぬる里に

歸り来て

夢路静けき

筑波根の

尾の上に立ちて

魂籠る

巖の前に

月見れば

丈夫ながら

つらきかな

西、鳥羽の江の

白浪も

東、浪速の

漁火も

ありとは見えぬ

山上の
可愛しき人の
墓に
添ふとは思へど
慰まで

二つ並べる

横ざる月と
秀つ峰を
伴なひて

雲も留めぬ

千里に渡る
み空より

風の聲
聞くに袖こそ

濕り行け
眞珠採收小舟

夥多漬ぐ
おーすとりあの

。

。

。

。

。

眺めし空は
近かりしに

夕の雲を
八島の浦の

路遠み
顧みて

祝言

野末の菊を匂はせし
日かけ傾くこの夕
君はやさしき花妻を
娶りたまふぞ嬉しき

千重の白雲隔りて
山と川との遠ければ
笄搖ぐ新嫁の

花の君には見えねど

今宵の人の祝にと
始めてあぐる酒杯の
高き香に胸透きて
聞け祝歌は成りにけり

亂髪
眞玉手觸れし
梳るに惜き

朝あさ
朗はるか
明めい

灯ほ
影かげ
に鳴な
らす

二弦げん
琴きん

餘韻よごん
漂ただよ

夕ゆふ
間ま
暮ぐれ

紅いろ
に泥なづ
める

唇くちびる
を

覆くわ
盆ぼん
子こ
の露つゆ
に

濕しゅ
す時とき

雪ゆき
催けい
の風かぜ

曝さら
されて

美うつく
し眉まゆ
の

曇くも
る折おり

夜よ
渡わた
る月つき

桂かつら
男を
よ

妻め
は憐あはわ
と

思へかし

八千代を契る

玉椿

幾久しくと

準らひて

(春の夜の夢に
馴染し枕をば
涙の堰と)

爲すもある世に)

うもれ木

うつゝともなく
夢ともなく
眞たま手かはす
にひぶすま

むなわけすぐる
そよかせに
見えても耻ぢし
はだ觸れて

子さへあげては
可愛しさの
いもせのなかに
まさましを

は、だに病まで
世にあらば
くも晴れよとは

ねがはねど

軽の池の浦曲
めぐれる鴨すらに
玉藻の上に

一人寐なくに

おもへばわれの
よきいへに
とつぐのぞみも

あだなりし

ねみだれやすき
くろかみは
とてもぬれなん
わが世なれば
おやゆゑせめて
よめらでも
とこをとめにて

身を終へば

つきかげひろき
小むしろに
かりきくよるは
憂くもよし

ありあけ

誰謂河廣、一葦抗之、誰謂宋遠、跂予望之、誰謂河廣、曾不容刀、誰謂宋遠、曾不崇

朝、琴子にかはりて生死さだめならざる横瀬正七郎君をおもふ

荒磯に騒ぐ浪の音を

八雲小琴に聞き倣して

手枕安く眠る夜は

旅のつらさの知られぬど

暁早く起き出で、

浦曲傳ひに有明の

月の淡き眺むれば
遠なる人の想はれて

同じ常陸の國ながら
鹿島の浦にさすらへば
故里忍ぶ月波根の
峰にも雲はめぐれるを

薔薇の花櫛姫やかに
侍き奉る令閨あらば

多くの年を一度の
音信無きもうべなれど

太平洋の旋風に
船共に渦かれてか
落機山に行暮れて
蛇に噛まれたまひてか

然ては亡くなりし母君の
み墓は獨弔ふも

なつかし君きみが僕おもがけ
正まに見る世よの無なかるらむ

浪逆なの海うみの
夕ゆ霧ぎりに
見えみがくれする
渚なぎさに立ちて
釣つ舟ふねを
歸かへるやと

はかなき占うらも

持ためしに

磯いそ馴なれ松まつが枝え
煙けぢりの中なかに
ほののぐと
沖おきにたなびく
現あらはれて
八や重へがすみ
あかね潮しおしたる
東ひがしはや

花 檜

髪に挿せる
花檜の
花の影さへ
軽き小舟を
水に泛べて
静なる
騰波の江の
漂はむ

かとりん海に
櫂とりし
ゑれんの君が
露もわが身に
備へねど
おもざしは
月波根の
小霧置め行く

尾上おのへを照す

夕月ゆふづきを

痛める胸きみに

長き思ひを

鑄つけて

山影やまかげ落おちる

浪間なみまの月つきに

湖みづうみの

つらくとも

棹さくさゝば

うきねの夢ゆめは

焼野の雉

越後僻地の俗陰暦七月十四日の夕ぐれ未婚の男女一堂に會り、くじを引きて各よすが
を定め、十六夜の月の入る迄は夜々遊びの庭に踊りたはれて、はがなき夢を結ぶとぞ
歌垣山に立ちなし、筑波根にがいひけん、それも昔とはなれるに。

一七〇

月影寫る姿見に

濡れし前髪搔かぐとて
花の釵抜きとれば
宿るか月の曉にも

室谷菅笠傾けて

月

稀に涙はかくせども

若紫の玉襷

肩に懸るがつらきかな

猿夜啼く筑波根の

峯の月こそ舊にけめ
母君ならで我胸に
手觸し人はなかりしを

今宵の月を形見にて

明日は絶えなん縁ながら
何しに軽き裳裾を

笛野の露に打たせけむ

過し夢路を今更に
辿りてもとは思ほえど
空に知られぬ雲出て
せめて月だに隠れなば

我は焼野の雉

我は焼野の雉
思出でては
ほろくと鳴く

うつしゑ

自雲迷ふ

陸奥の

平の里に

月し見て

旅ならなくに

古里を

戀ふる夕の。

ありてにか

七歳ぶりの

寫眞を

吾に寄すとて

妹が

またのをゆびを

染めにたる

墨こそにじめ

しなやかに

やさしかりける

母ぎみの
幸くいませし

ころほひは
三日月なせる

汝が眉を
見ぬ朝とても

手離惜しみ
わが肩に

無かりしに

下髪の

縄りてなきし

かたちながらに

らうたけて

忘れて結ぶ

白河あたり
夢路にも

花櫛匂ふ

黒髪や

忍しの
かす
かにこれと
似かよ
へるは

立た
つ霧きり
に

忍しの
び渡わたり

し

か

かす
かにこれと

似かよ

へるは

おもかげの

賤 機

一

女よ
男お
居ゐ

てさへ

筑波つくば
の山やま

に

霧きり
がか
かれば

か

佐渡さわ
の小島こじま

の

夕浪ゆふなみ
千鳥ちどり

り

彌彦の風の
寒からん

越後出でから

常陸まで

泣きにはるぐ

來はせねど

お月様さへ

十三七

お父戀ふるが
無理かえな

三國峠の

岨路を

越えて歸るは

何時ぢややら

やはり妹と
背負繩かけて

薪拾うて

居つたもの

お才あれ見よ

越後の國の

雁が来たにと

欺されて

彌彦山から

見た筑波根を

今は麓で

泣かうとは

『心細さに

出て山見れば

雲のからぬ
山は無い』

二

いかばかり分け迷ふらむ名に立てる春の霞の浦を曇ぐ舟、お才のち人にそそのかされ

一八二

一八二

一八三

て落人となれるに

人は釣する浪逆の海の
霞に迷ふ舟の上
吾は木萱に心置く
二人連立つ落人の

お主に叱られ子にせがまれて
間に無き名を立てられし
子守の頃の撫髪も
誰故亂さぬ頬冠

「小袴きりりと
端折りて
邪魔な袂は
断たうか」

浅間の煙立つとは見えて
西は入日のくれぐれに
霜おく石に枕して
臥すも一夜の夢なれば

「端はしをくはへし
手拭てぬぎの
下したに洩もるゝは
三み日かづ月つき眉まゆか懷なつかしや

袖そでが長ながくば
手てをを
背せかに廻まわして
結むすびやれ

河原柳

さりとは柳やなぎの影かげばかり
空行そらゆく月つきの澄すずめる野のに

年としは七ななつか九ここのか
對つの振袖ふりそでゆらゆらと
紅燃くれなるもゆる玉櫻たまざくら
同花笠おなじはながさしやんと着きて
三み日かづ月つき匂にお細眉毛まゆけ

立てし計りにやさしくも
月を厭ひて朝顔の
花の面を背けつゝ

稍、取り上し前髪の
濡れし子は無からんに
花がかかると夢に見た
少女が夢は現か

囃の笛の音につれて

心躍らす唄きけば
月の兎にあらねども
秋風寒き野に立ち
お夏お七も踊るらむ
尾花が末に環をなして
かへす裳裙は白露に

嫁よめさ行きやるに
何々買なにくかおぞ

棹さをは九こ棹さを總桐簾筈ざらぎ
銀くわんに金無垢着きんむくきせうかお嬢よめ様さま
朱しゆ塗ぬりの長持車ながもちくるまに積つんで
紋もんは漆うるしの藤巴とうば

ほんに嫁よめさ行きやるなら
買かはんせ鏡かがみ

耻はずかしいとて泣ないたお顔かほも
行くは厭いやぢやと言おしゃつた駄々だだも
夢ゆめかあとなき春はるの夜よの
枕まくらばかりが寫うつらうに

面影おもかげかくす綿帽子わたぼうし
幽ゆしがらりよとわゝ扱あそ
差さいた口紅くちびる忘わすれても
酒さけに汚よすな盃さかづきの

十七少女の細そり眉に
明けて剃刀當る時
淡きに馴れしわげまきの
絹紐の色は惜むとも

巻繪の櫛の牡丹花の
花のお方と名に立ちて
映る燈の光もまどふ
帶は綸子の八重廻

野水を憶ふ

鶴立つ野の空清み
西に聳ゆる富士の山
入日眩き光さして
うす紅に匂へれど
慰めも無き夕ぐれの
豊旗雲も消え行けば

馬草背負て歸り来る
少女の顔も幽かなり
思へば病みて小食に
こい伏す友もつらからむ
瀬戸の内海風立ちて
鳴門の秋に鷗鳴く夜は

ちぬの浦曲

八重の潮路の沖つ浪
邊にたつ浪に誘はれて
ちぬの浦曲に友と
君が見してふ月かこれ
磯の真砂を踏ならし
袂連ねて辿りし
影やうつると眺むれど

わが世の月は朧にて

須磨のみ寺の鐘の音を
敷へ玉ひし俳も

君が玉章読みし夜の

月にもそれと見えざりき

寝ねで明し、獨ねの
夜の心を知りまさば

土産には過し浦々の

寫眞なりと有らましを

千鴻漁りてみてづから
拾ひ玉ひし貝みれば
潮垂衣まだ着ぬに
をぞや袂に月照れり

厭はれざらば舵枕
君と重ねて住の江に
行きてもがもな岸遠く

晴れゆく月の影浴びて

妻かと人の問ひし時
然りと對へ給ふとも
茅奴の浦ねに坐す方も
美はし妻はおはすべし

諏訪の淡海の一葉舟

漕がせし夜半に月出で、

隈なき光眺めしは

夢かと思ふ今なれば

花

藻

矢部海軍大佐夫人を悼む

下這ふ野火の
薄煙

火中に立ちて
はしきやし

橋媛を

問ひにけむ
あづまは國の
名となりぬ

寝くたれ髪を
猿澤の
池の玉藻と
靡かせて
形見の衣
掛してふ
柳は今も
青かるに

新肌觸れて
寝ぬる夜の
夢暖かき
琉球の
島にはあらぬ
伊豆の海に
溺れし君が
涙はよ

岩に觸れては

舟隱れにし
沖にこそ
沈みたり
逆捲く浪に
顔は花と匂へる
碎けむ胸も
延ばひし胸も
白玉を

傾く月の
色汎ゆれ
骸は汀に
寄りぬるを
天驅りても
しるらんか

柔肌

昔メルシャの伯、苛き政を布きていたく所領の民を疾ませし時、夫人切りに諫め參らせしかば、汝衣著けて馬に乗り市を行けば許さんと言ふに、餘りなりとは思ひ給ひしが、情深うおはします性なりければ、終に裸體のまゝ馬上にてまちくを歩ませ給ひきと聞きて、野水と共に作れる

潮風ぬるき
春の海の
船おぼろめく
浪の上
あるか無きかに
照したる

月は千春の

夜を趾りぬ

二〇六

玉の御飾
赤裳の裾を
赤裳の裾を
地に曳いて
畫堂にかかる
裸體畫は
背向過す

姫君の

七重の衣
遮ふ影無き
駒の足搔の
駒の足搔の
めるしやの街に
曝しけん

二〇七

乗るは現か
火の鞍に
現世の姿は
忘るとも
錦の帳
奥深く
綾の裾に
居馴れて

星薄れ行く
朝ぼらけ
人目耻しき
姿見に
寝亂髪を
搔上とて
紅潮し
君なるを
宮に歸りて

衣の亂れを
脱ぎ置し
手にとりて
失はれたる
涙は頬をも
色見れば
濡らしけん

夢静なる
手枕に

触るゝを許す
妻ならば
蜂舞ふ園の
花にすら
一人行くをも
許さざらんに

二十八宿畢

二二二

明治四十年二月五日印刷

明治四十年二月十日發行

著者

三十八宿

金五拾錢

横瀨夜

不許

複製

發行者

東京市京橋區五郎兵衛町二十二番地

金尾種次郎

東京市京橋區築地二丁目二十番地

河本龜之助

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

杉本

東京市京橋區五郎兵衛町

金尾文淵堂

大坂市東區南渡邊町

發兌元
發賣元
杉木本書店

文淵堂圖書要覽

(振替口座)
三八一七

宗教書類

綱島梁川	病間錄	(版五)定價金壹圓 小包料十錢
編輯局	病間錄批評集	(再版)定價金壹圓 小包料十錢
病間錄	病間錄批評集	(再版)定價金廿五 郵稅四五錢
見	神論評	(新刊)金七十 郵稅八錢
舊約物語	(新刊)	金壹圓五十 小包料十五 郵稅二十二 錢
基督教物語	(再版)	金壹圓 小包料十 郵稅二十二 錢
中村春雨	新約物語	(新刊)金壹圓 小包料十五 郵稅二十二 錢
中村春雨	新約物語	(新刊)金壹圓 小包料十五 郵稅二十二 錢
兩字綱島氏佐美島 解説松井解説 昇密著解		

文淵堂發兌圖書賣元

東京市神田區表神保町
東京市神田區裏神保町
東京市日本橋區吳服町
東京市京橋區中橋廣小路
大阪市東區南渡邊町
京都市烏丸佛光寺東入
久留米市米屋町
名古屋市宮町一丁目

東京堂書店
上田屋書店
北隆館書店
前川文榮閣書店
杉本書店
東枝律書房
星野文星堂
菊竹金文堂
東海堂書店
房星堂

科學及雜著

小說書類

脚本演劇書類

菊池幽芳	妙な男	(全二冊)	一冊六十錢
菊池幽芳	秘中の秘	(刊近)	未定
柳川春集	七日間	(品切)	
須藤南翠	縁の糸	(新刊)	金六十錢
大倉桃郎	間一髪	(新刊) 郵稅金七十五錢	
大倉桃郎	琵琶歌	(四版) 郵稅金六十錢	
大倉桃郎	舊山河	(再版) 郵稅金六十錢	
天佐野天聲	露の曲	(新刊) 郵稅金六十錢	
柴二草野	モリエル全集	(近刊)	紙數千頁
小波巖谷	喜劇七草	(新刊)	金八十錢
天佐野天聲	不死の誓	(新刊)	
武室田里	無線電話	(近刊)	未定

詩集書類

白浪詩集頌

榮

(新)金四十五錢
刊郵稅六錢

薄田泣董白羊宮(新)金一圓
刊小包料十錢

薄田泣董白玉姬(新)金八十錢
刊郵稅八錢

薄田泣董童子守唄(近)未定

薄田泣董行く春切品

薄田泣董暮笛集草(版三)金六十錢
郵稅四十錢

薄田泣董鐵幹品毒(新)金五十錢
刊郵稅六十錢

薄田泣董河井塔覺草(版三)金五十錢
郵稅六十錢

薄田泣董高安寝覺草(版三)金六十錢
郵稅六十錢

横瀨夜雨二十八宿影草(版三)金五十錢
郵稅六十錢

横瀨夜雨河井醉茗塔覺草(版三)金五十錢
郵稅六十錢

横瀨夜雨外女史戀衣(版四)金四十錢
郵稅四十錢

横瀨夜雨晶子黑髮(新)金五十錢
郵稅四十錢

横瀨夜雨晶子口英百人一首(近)未定

横瀨夜雨米次郎譯

與謝野小扇(版三)金卅五錢
郵悅四十錢

與謝野二女史戀衣(版四)金四十錢
郵稅四十錢

與謝野幹鐵黑髮(新)金五十錢
郵稅四十錢

與謝野氏選口英百人一首(近)未定

與謝野晶子芭蕉(木版)金一圓
小包料十錢

與謝野眞蹟俳諧三十六歌仙(木版)金一圓
小包料十錢

筆蹟及畫集

水彩畫講義錄

郵稅不要

月刊書類

日本及日本人

每月一回一日
一冊金二十錢
郵稅一錢五厘

島村抱嶺主幹

早稻田文學

每月一回一日
一冊金五十
錢郵稅一錢五厘

丸山晚霞主幹

水彩畫講義錄

每月一回一日
一冊金六十
錢郵稅一錢五厘

歌集書類

與謝野夢の華

(新)金八十錢
刊郵稅六錢

與謝野亂れ髪

(版四)金卅五錢
郵稅四錢

與謝野晶子

夢の華(新)金八十錢
刊郵稅六錢

白浪詩集頌
泡鳴泡鳴詩集
野口劍と戀の日本(品)

岩野泡鳴詩集
刊郵稅六錢

榮

(新)金五十錢
刊郵稅六錢

中澤水彩富士十二景(全四冊)
弘光木版富士十二景(全四冊)一冊金五十
錢小包料各十錢

年度三十九
白馬會紀念畫集

金九十
錢郵稅不要

小林萬吾風景水彩畫帖(木版)

金五十
錢郵稅不要

一色白浪作 中澤弘光畫

(二十八宿の姉妹集!)

宗教詩集頌榮

口繪木板畫入美本

全一冊定價四拾五錢

郵送料金六錢

著者のはしがき

▲宗教と文學の調和など云はむは我れにありて餘りにこちたき業なれど而も歌と祈
はわが一日もなくて叶はぬもの也▲人間悟れば詩なしと云へるは既に聞きし所也さ
つれば宗教が藝術に近づく程そが光を失ふとし思へる人もやあらん只わが心にては二
所謂心の悟りにあらずして魂のあこがれなると共に藝術は藝術の爲と云ふ事も我解
わき能はぬ所なればなるべし▲わが見る所誤まれるか世の人の疑ひ當れば
され此解決は各自の心に覺る日あるべく又進みて之を説かん人も乏しからざらん我
今この小冊子を旨としてわが教會の爲に編む事とせり神若し許し玉はゞ他日更らに
文壇に捧ぐべきものを得べしと信す。(下略)

發兌元

東京京橋區五郎兵衛町

金尾文淵堂

日本及日本人

毎月二回一日十五日發行
四六二倍形每號百頁餘
一口繪寫眞版及木版數面入
一冊十五錢郵稅一錢五厘
半年一圓八十錢一年三
圓六十錢(郵稅を要せず)

「日本及日本人」は雑誌「日本人」の改題にして、前「日本人」は彼の日刊新聞「日本」と系統を同うし、三宅雪嶺氏之を主幹して其一貫せる主義主張 政治、教育、文藝の諸方面に一派の權威たりしが、明治三十九年末、日刊「日本新聞」の新社長、多年の主張を傷け面目を汚すや、雪嶺氏以下廿二名の記者憤然連袂退社して「日本新聞」を廢滅に歸せしめ其特長の一切を擧げて雑誌「日本人」に併せ此に「日本及日本人」と改題して發行せらるゝに至りたる也、今内容の一班を言へば、雪嶺氏の原生界及副生界は數十蔬に亘る哲學上の大文字にして、古一念氏の人物評論、國分青崖氏の評林亦常に異彩を放つもの、卷初には東西南北と題する獨特の政治評論あり、其他日本俳句を選し、河東碧梧桐氏の一日一信は氏が三千里旅行の通信にして趣味津々たり、猶改題と共に内藤湖南氏は政治論を、角田浩々歌客氏は文藝評論を新に來り受持たれ、又毎號各大家の執筆に係るものは號毎に光景を變へ面目を新にし來りて讀者に見ゆべく豊富多趣の内容一々挙げて謂ふに遑あらず。

早稻田文學

編輯所 東京牛込區藥王寺前町廿番地
東京牛込區中町二十五番地

文藝協會 文藝協會事務所
○○毎月一回一日發行一冊廿錢郵稅一錢半
一年前金二圓四十錢(郵稅不要)

一本誌は元坪内逍遙氏主幹の下に七年間文壇の重鎮たりしもの、一旦休刊の後明治三十九年一月新なる希望と抱負とを以て再興せられたるものなり。

一本誌は文學、美術、演藝、宗教、哲學、史傳、風俗、各方面的評論及び小説、詩歌、脚本等の創作、翻譯を文壇の新舊諸派にわたりて、選拔採錄すると共に、每號卷頭には數十頁の長論說若しくは創作翻譯等の完結せるものを載せ、是而已にても優に一冊の著書たるに足るの面目を具へしむ。

一本誌の彙報欄は文藝教育諸方面の現狀を彙集し評拆して精博公平穩健を旨とし文壇の趨勢をして一瞬の間に去來せしむ、是れ本誌の擅場なり。

一本誌現任の主幹者は島村抱月氏なり。

一本誌は文藝協會と聯合し之が機關として文藝の實際方面に活動する外、採錄する所の文章には何等の偏したる標準をも挿むことなし。

發兌元 東京市京橋區五郎兵衛町二十二番地 金尾文淵堂

